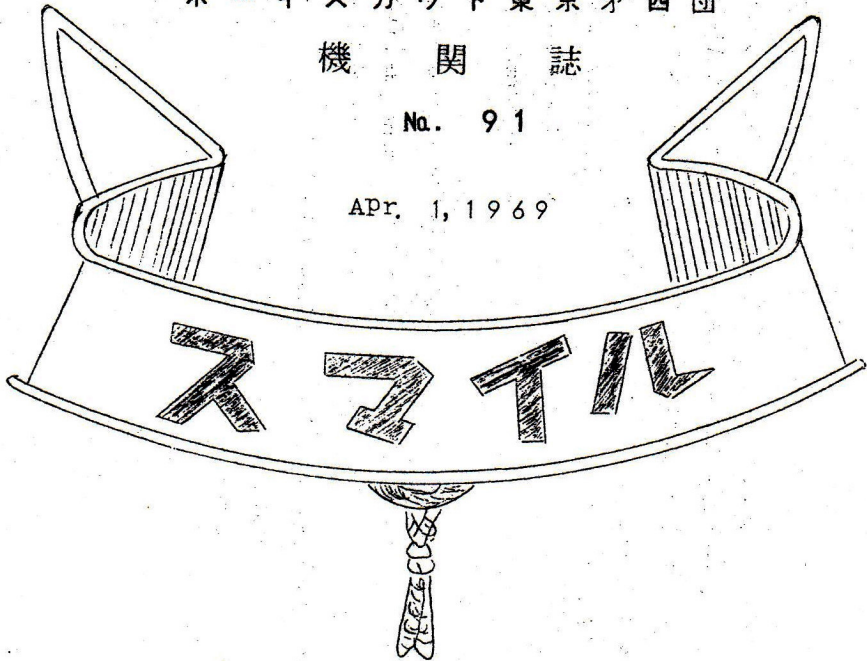


ボーイスカウト東京第四団

機関誌

No. 91

Apr. 1, 1969



さようなら

僕達の団委員長 田中先生

先生は僕達に黙って遠い遠い所にいってしまったのですね。あの大きな身体で、ニコニコして、「元気でやっているかい」と、もういっては下さいません。僕達の活動をいつも暖かく、キラッと光るメガネの奥からあのやさしい眼で見えていて下さった先生は、もう僕達の手の届かない遠くに行ってしまったわれました。楽しかった春のバスピクニックや、夏のキャンプ。それにも、先生のお姿をもう見ることは出来ないのですね。でも遠い国で先生はきっと、「しっかりやっているね」と僕達を見守っていて下さることでしょう。先生がいつもいっておられた、「人に役立つ人間」になれるよう、僕達は一生懸命にスカウト活動に励みます先生、どうか神さまのおそばでゆっくりお休み下さい。

「先生、さようなら」

(三月七日 告別式の弔辞より)

十年以上にわたって私達の四団を心から愛し、チャーチスカウトとしての成長を願ひ、その育成に限りない力を尽して下さった田中正男団委員長が亡くなられてから、もう一ヶ月が過ぎました。先生がいつも楽しみにしていらしたバスビクニックの季節になり、数々の想い出が浮んでまいります。みなさまとご一緒に先生のご冥福とご遺族の方々への神さまのお恵を心から祈りたいと思います。

先生は生涯を敬虔なキリスト者として貫かれ、その信仰は私達のスマイルにお寄せ下さった数々のご遺稿の中にも明らかに見ることが出来ます。スカウティングを謙虚に考える意味でも又先生のスカウティングへの姿勢を改めて思い出し、私達の道を明確にするために、先生のお言葉を過去のスマイルからいくつか拾ってみました。

昭和四十年十一月 スマイル七四号より

「スカウト運動と奉仕の精神は元来切っても切れぬ縁があるはずである。ところがこのごろは進んで奉仕をしようとする気持が少ないのではないか。土曜日スカウトが終った後、自分達の部屋はきれいに清掃され整頓されているだろうか。日曜日の朝、礼拝に来る人が気持よく過せるように教会の周囲を清掃することだ。一つの小さな奉仕だ。報いを望まない奉仕の精神、それこそスカウトの精神ではないだろうか。手伝ったらくらく出来るだろうか、食事は出してくれるだろうかなどと考えずに、たまには損をしようじゃないか。

どうだろう。

昭和四十二年一月 スマイル新年号より

「……現在の四団をみると、団体こそ大きくはなつたが末端まで血が通わない為か、活動がにぶくなっていく感じがしないでもない。過去の隆盛の上にのって繁栄しているようにみえて、内部にはかなりガタがきている様に感じているのは私一人ではなさそうだ。どうかこの記念すべき二十周年を迎える今年こそ四団再出発の年として貰いたい。四団はクリスチャンスカウトなので、リーダーは一人残らず受洗する位の信仰をもって貰いたいものだと思う……」

昭和四一年のスマイル七六号

より、田中先生のプロフィール

ルをもう一版。

「いつみてもニコニコと、名実共に四団の大黒柱の田中先生。ホーヨーリヨクがあつて、やさしそつというのが皆の評判です。

奥様と二人のお嬢も皆四団のスカウトに關係のあるスカウト一家。お仕事は早稲田大理工学部の鉱山学の教授です。鉱山なんてかたーいお仕事のわりには、丸みがありますね。一九一九年生れといひますから今年で四七才。教会の下の谷町でオギヤアと生まれながらこれまで途中二年間だけアメリカ留学のため家を離れただけで、ずっと同じ所に住んでいらっしやるというぬしみたいな存在。家の中には明治の頃からの本が山のように。趣味はもっぱら貯蓄と読書。お金は一〇円計算があわなくても何時間も考えていらっしやるとか。ただ、ためるだけがお好きだそうですから、何かの時のために先生のお家だけは、覚えておいた方がよいと思ひますよ。とにかく全ての事を、きちんとするのがモットーの先生。

先日は欧州での会議を機にご夫妻で二ヶ月間世界旅行をなさり、いよいよ見聞豊かな頼りがいのある団委員長。」

田中先生を想う

青年隊隊長 今 田 富士雄

東京才四団の今日をあらしめたのは、といへば、まず才一に田中先生の名をあげなければならぬ。日本連盟の規約改正により、団制度が制定され、それまで、カブ隊、スカウト隊、シースカウト隊とそれぞれの隊委員会で運営されていたものを一つに集約して団の運営と、それぞれの教育面の責任をとる団委員長として、昭和三十三年十二月の団制度実施と同時に、田中先生にご就任いただき、以来十年間この重責を完遂なされたわけです。この間、チャーチスカウトとしての歴史と伝統のある四団の指導と育成に、先生は卒先してあたられ、一五三団、一五五団と二つの団を發展的に分団され、それぞれ、大きな働きをするまでに育成されました。又四団としては、発隊以来、十二年目にして初めて、安積君（現在国連勤務）を初め、五名のスカウトを、フィリピン世界ジャンポリーに派遣したのは、就任一年目の田中先生のご尽力の賜物でした。その後、アメリカのナショナルジャンポリー、ギリシャの世界ジャンポリー、

沖繩親善訪問、アメリカ世界ジャンポリーと機会あるごとの海外派遣を推進して下さいました。

田中先生から直接ご指導をいただいた古手のリーダーは、県連、日連でも大いに活躍し続けており、特に前少年隊隊長は山梨県コミッションナーとして、又杉原副団委員長は東連副コミッションナーとして日本のスカウト運動の為に奉仕をするまでに成長したわけですが、二十二年の歩みの中の成長期に、先生は団委員長として、如何に、チャーチスカウトとしての四団を發展させてゆくに心を痛めておられました。スカウト運動は、キリスト教を基盤として発生したものであり、スカウト活動の真価を發揮する意味においても、四団は、すべての器がそろっているのです。我々一人一人のチャーチスカウトとしての自覚がこの運動の發展につながるものであり、田中先生に對するご恩に報いる道になりましょ。

お世話になりましたノ

前少年隊副長 白 井 純 一

十余年のスカウト生活、それは全く変化に富み、又短かい月日でした。昭和三十三年六月、故田中団委員長との面接に始まり、一年一年スカウト経歴を積み重ねて現在に到り、此の度、会社就職のため四団から去る事になりました。この間お世話になりましたスカウト、リーダーの皆様から感謝いたします。

B Sでの思い出が脳裏に浮び感無量です。小学六年、B Sに入隊し、熊班の仲間入りをしたが、味噌カスで何をやったらよいのやら、右往左往する動物園の小熊同然でした。そしてリーダーの指導で無我夢中に甘いオブラートに包まれたスカウティングをやり、自分なりに吸収して野営地でそれを発散させて満足し、「僕はスカウトだ、他人には出来ない事も自分は出来るのだ。」と自己満足に浸り、技術面を重視し、精神的発展を怠ってしまいました。その中、高校生活ではスポーツによって、スカウト活動より一層肉体的精神的苦痛を伴う、クラブ活動に接し、その魅力にひかれ、僕の生活の

中でスカウティングの占める割合は徐々に減少していききました。しかし、スカウト活動の良さは忘れる事は出来なかつたのです。それは、同じ目的に向う者が感ずる共感と野営で育まれた者とのみ厚く友情であり、これは学友のそれとは違うものです。そしてその良さを今ほど強く感じた時はありません。更にリーダーとなり、技術と精神の融合をはかり、スカウト運に還元する立場に置かれた時、スカウト運動の深遠さと重要性に立ちすくむ思いがしました。スカウト運動は、自分を磨き又友人をも磨き上げていくのです。そして皆さんの努力が歴史を築き上げていっているのです。

そして最後に一言。

「B Sの諸君、夜空に輝く北極星を中心に規則正しく廻る七つと五つの星群を見て皆は何を思うかな。野営の夜、空を見つめて考えてごらん。君達は他の少年達にくらべて、自然の中に融けこめるのです。そこには素晴らしい天と地の営を観察出来、君達の目を潤し、美しい物を素直に取らえる心を養ってくれるだろう。その心を都会の中でも忘れないで下さい。」

「B Sの諸君は現在のスカウト運動について真剣に考え始めた様ですね。今後の実

が楽しみです。人間社会の中でのスカウティングも考えて下さい。」

リーダーの方々からは、私のスカウト時代の幾倍もの物を吸収させてもらいました。それに対して私は、機械屋の知恵をお教えします。それは我々が製品を開発する時、才一に考える事は機能を果す事、次は性能を発揮する事、最後が機能美です。四団は今までこの機能美に気をとられすぎてはいませんでしたか？ それと目標に達するためには、妥協出来ない線は絶対に守るが、それ以外はどんな変更も行ない、それを許す柔軟な思想をもち、失敗を恐れずそれを栄養とすべく実行することです。即ち実行あるのみです。

皆様のご健闘を遠方より願っています。

白井さんの住所

北九州市八幡区熊手

小鷺田一八九一

安川電気同和新寮

藤倉学園奉仕に又「これがシニアだ」など二月から発展的なプログラムを進めているシニアにスポットをあててみました。……

誰でも持っている

土曜日の午後三時——

年長隊隊長 日下部 英 一

現在年長隊は百塚副長、河辺副長補、盛田上級班長、それに隊員十三名程が実際の活動に参加しており、四十三年度の一年間の任規を務めた元上級班長渡辺博君より盛田英夫君にスカウト活動のバトンが二月二十二日の展示会より移されたのです。

上級班長の任務は同年年の者が、リーダー側の意向と、スカウト諸君の欲求との間にたつて、それが最善の方法であるかを探し出し、又その目的の為にスカウト諸君をリードしていくという責任を持ち、又その反面その過程を通して自分自身の行動力、決断力、指導力を高め、目的に合った団結を促し、勉強していくのだと思います。

去年は西伊豆半島六十五キロの移動野営を通して、キャンプの難易は別にしても、諸

君達のたてた計画をやり通すという目的、それはリーダー側の意向であったかも知れませんが、スカウト諸君の協力とに依って、少しでも達成出来た事は、多くの反省すべき点は残しているとしても学ぶところが多かったと思います。それに今迄慣例として行っていた秋津養育園の奉仕に対する諸君の批判——スカウト諸君は養育園が既に恵まれた環境にある、もう助けをあまり必要としないのではないかとという理由でその奉仕には少数の者しか参加せず、結局養育園に対する最後の奉仕は、リーダーの助けを借りて行った後味の悪いものであった。それには一度決定した奉仕について相手の方々が期待している時、諸君自身の十分な体制がとれていないという理由で参加しないという自分勝手な考え方が見られ、その後川田君の御母様より八王子の藤倉学園がもっと切実な奉仕を必要としているとし、一日で終える事の出来なかつた奉仕を非常に一生懸命に一致した協力体制と責任感を持って行った事は認めても、これは多に反省すべきものではなかつたか？

又奉仕について、秋津養育園を前に述べた理由で余力を入れずにいて、一方

藤倉学園に奉仕した気持は良く分るのですが、諸君が比較的恵まれていると思つている秋津養育園でさえ、まだまだあの養育園に入りたいという多くの身体障害者がせつかく二階の部屋が準備されているのに、看護婦さんが足りないという理由で入院を拒否されている社会の現状を決して忘れてほしくありません。

奉仕はともすれば、相手の方々に對しても「奉仕をしてやる」という気持になりやすいものです。でもその相手の方々、学園の運営をしている人々もおそらくは、諸君の誇りとするスカウト精神と同じ様な精神を忘れず、毎日つくしていると思います。

この四月二日より四日まで、はじめての雪中キャンプを山中湖で行うという計画書がリーダーに提出されています。もう大雪が少なくなっていると思いますが、寒さなど夏のキャンプとは違った時点で色々な状況を想定して計画をたてて実行していくのは団体活動する諸君の努力であると思えます。

そのスカウティングを諸君の作成した「スカウティングへの再考」で見られる様

に、現在同じ年代のスカウトの全てが持っている高校生としてのスカウティングの目的を探すという悩みをどう解決するか、諸君がもし今迄の活動に不満を持っているなら自分自身の理想——あるべき姿——に一步でも近づく様にプランをたてて下さい。

土曜日の午后三時間。それは同じ高校生に限らず、誰でも持っている時間なのです。その時間を学校生活とは違った活動の中で友達を求め、互いを批判し合う。その場を持った諸君にはその時間を活かし発展させる事が出来るのです。そして自分自身の問題として提起した以上、決して今迄行ってきたスカウト活動を尺度とせず、高校生としての力を充分發揮出来る納得のいくスカウト活動を見つけ出し、チームワークと行動力を持って欲しいと思います。それは諸君がスカウト活動を離れた時にも欠く事出来ない大切な心掛だと思ふのです。そしてその為にリーダーは少し丈手伝いをします。

最後に、本当に年長隊員として活動出来る高校生になつたばかりのスカウト諸君に勉強を決しておろそかにしない様にして下さい。それは前に述べた納得のいく活動とも相反するものではないと思ふからです。

以上色々述べて来ましたが、年長隊の活動に対していつもOS、BSのリーダーの助言と協力、RSの奉仕を感謝している事を申し添えておきます。

『これがシニアだ』 の計画について

年長隊員 渡 辺 博

何故あのような事をしたかと申しますと、今まで四月頃になると、なんとなく終って、人員が入替わっていたわけです。それは底のない「ザル」のようにしまりのないものでした。そこで一年のまとめのつもりで文章にしてみただけです。「シニアの中ですればいいじゃないか」といわれるかもしれないませんが、BSからシニアに入隊してもまごつかないように、本当のシニアというもの自分の目で見て確かめる助けにするという事もその目的の一つなのです。シニアスカウトとして、スカウティングの中で僕達が考へてきた「主体性」というスカウティングの本質を理解してほしかったからでもあります。

これらの理由が今回行った大黒柱になっています。

『これがシニアだ』を 見て感じたことなど

少年隊副長 大内 丘

スカウティングを行っていくにあたって、その行なわれるプログラムがスカウトの興味を引く様なものでなければならぬといふことは、プログラムを立案する者が常に考へていなければならぬ問題である。この点から見れば、「これがシニアだ」というプログラムは大成功であったといえよう。とにかく、僕は久しぶりにシニアのスカウト連中が、熱心にプログラムに取り組んでゐるのを見たのである。

去る二月二十二日、すみれの室において「これがシニアだ」という催しが行なわれた。そこには夏期キャンプの報告、冬期キャンプの計画、パンの作り方、山の断面図の描き方、その他、写真、チーフリング、テントなどの展示や、「スカウティングへの再考」と称したパンフレットもあった。また庭には、モンキーブリッジが作ってあった。要するに、高校の文化祭でよく見かける類いのものである。

単純なケチをつけようと思えばいくらでもつける事ができる。誤字だとか、モンキーブリッジの構造上の欠陥だとか、繩の結

び方の間違いだとか、このように枚挙にいとまがない。

このようなケチをつけることは、よけいなことで、どうでもよいことであろう。それ以外に僕にはたいへん素朴な疑問を出してみたい。それは一体なぜ、どういう目的で、このようなプログラムを行ったのであろうか。何か目的があるなら、当日何らかの形で、どういう意図の計画をしてその結果どのような結論が出たかということ——つまり総括——が発表されて然るべきである。また、シニアのスカウティングを広めたいなら、四団内部ではなく、もっと外に向って呼びかけがなされてよいはずである。以上のような僕の疑問については、当然シニア諸君は、充分な討議を経た上でやっていられるのであろうが、僕のような外部の者には皆目見当がつかぬ。

最後に、大変よけいなことかもしれないがつけ加えて頂くが、シニアにおけるスカウティングにおいて、総括が行われないうという事は、スカウティングの進歩、発展を否定するものであり、またスカウティングを行なうことが、単なる自己満足を得るためだけのものに堕してしまふ危険をはらんでいることを承知して欲しい。

シニアとともに奉仕して

年少隊副長 里見明子

人のお世話にならぬよう

人のお世話をするように

そしてむくいを求めぬよう

という誰でも知っている我らBSの先人の言葉であるが、奉仕をするという時にいつも思い出すのがこの言葉である。

暮の団会議でシニアが藤倉学園へ奉仕に行く事を聞き。以前、秋津寮育園に行つたが、もう設備がほとんど整っているから、もっと行く「必要」のあるところを、と場所をかえたそう。丁度その時、シニアだった川田君のお母様が関係していらっしやる施設があるというので話は藤倉学園とすぐ決まった。

その日参加したのは、シニア、ボーイ、リーダーを合せて二十名近くだった。シニアは大張切り。リーダーも参加出来る人は是非という事で、私も一日一諸に参加する。

スカウティングには四つの大きな柱があるといわれる。健康、技能、人格、奉仕がそれである。この四つの土台を基にしてプログラムが組まれる。年令が上になればな

るほど、奉仕も対社会的になる。

柵作りやお掃除、ハト小屋作りと皆休む暇もなく動く、日頃の訓練のたまもので工具を持つのも手なれたもの、ただ、お掃除は、GSでも来てくれれば良かったのにと思う。二月のGSとのリーダー会で、この奉仕に参加するのは忙しいからと、断われ、急な事とはいえず少々残念な事だったBSリーダーで話し合った。

シニアの奉仕も出来れば年二回位したいといっていたが、藤倉学園のためにも定期的に、細くても長く奉仕すると良いのではないだろうか。それもシニアだけでなく、団全体で出来る範囲のサポートをしていったらと思う。

四月二十九日は

パスビクニック

です！

報告

Ⅱ 団会議 Ⅱ 二月八日 出席者九名

一、上進時期を現在九月を四月に変更

出来ないか(再検討)

一、藤倉学園奉仕を団全体の年間プログラムとして考えたらどうか。

一、BS運動に於ける真の目標とリーダー自身の発展についての討議

Ⅱ 団委員会 Ⅱ 二月二十一日 出席者十三名

一、育成会費会計中間報告にともない

夏期キャンプのリーダーの経費、実

修所その他講習会参加費、海外派遣

費の積極的な使用、賛助会員呼びか

け等の討議がなされた

Ⅱ 団委員会(臨時) 三月六日 出席十三名

一、育成会費決算報告及び各隊より提

出された次年度予算案の検討

Ⅱ 団委員会 Ⅱ 三月八日 出席十四名

一、行事報告

一、登録の件

一、後任団委員長の件

一、青年隊との話し合いの件

Ⅱ 父兄総会 Ⅱ 三月二十二日

出席 父兄 三十一名

リーダー 四名

一、昭和四十三年度育成会費会計決算報告

一、次年度育成会費予算案承認

一、新リーダー紹介と承認

一、退団リーダーへの感謝

行事予定

バスピクニック

四月二十九日 三浦半島 長浜

人事往来

ご奉仕ありがとうございました。

○ 白井純一前少年隊副長は安川電機就職のため退団されました。

○ 田中万里子デンマザーは学業に専念されるため退隊されました。

○ 辻啓一少年隊副長補、片岡孝年少隊副長補はそれぞれ副長に就任しました。

編集後記

私達にとって大切な、かけがえのない先生を、この大事な時に失なってしまう事かと思いますが、力強い歩みを協力して続けてゆく事の種を先生はまいて下さっていらしたという気がします。

少しでも先生を偲ぶ事が出来たらと思いましたが、努力不足でまとまりがつかずお許し下さい。いろいろとお忙しい中、出張先、旅行先、キャンプ前夜とこのスマイルのためにご協力下さった皆さまに心からお礼申し上げます。

スマイル

発行日 昭和四十四年四月一日

編集人 杉原 正

発行所 港区赤坂一―一三―一六

日本ボーイスカウト東京四団